

第4回文化・教育委員会議事録

1. 開催日時：平成29年2月24日(金)10時00分～12時10分
2. 開催場所：虎ノ門ヒルズ森タワー9階 会議室TOKYO
3. 出席者：

＜文化・教育委員＞(五十音順)

青柳正規委員長、池坊由紀委員、市川海老蔵委員、今中博之委員、
本間俊氏(大橋明委員代理)、小山久美委員、桂文枝委員、コシノジュンコ委員、真田久委員、
篠田信子委員、杉野学委員、銭谷眞美委員、セーラ・マリ・カミングス委員、田中稔三委員、
野村萬斎委員、深澤晶久委員、松下功委員、宮田慶子委員、村田吉弘委員

＜臨時委員・オブザーバー等＞

多田健一郎内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局企画・推進統括官
杉浦久弘文化庁長官官房政策課長、勝又正秀スポーツ庁オリンピック・パラリンピック課長、
下川眞樹太外務省大臣官房国際文化交流審議官
桃原 慎一郎東京都生活文化局次長、堤 雅史東京都教育庁次長
吉本光宏氏

＜組織委員会＞

森組織委員会会長、布村副事務総長、中村企画財務局長、藤澤広報局長、小野スポークスパーソン、
小幡企画財務局次長

4. 次第

【報告】東京2020大会の準備状況

【議題】1. アクション&レガシープラン2017及び東京2020参画プログラムの状況・今後の展開

2. 東京2020フェスティバル(仮称)の方向性
3. 東京2020教育プログラムの進捗と今後の方向性
4. 開閉会式に向けた基本方針

5. 配布資料

資料1：文化・教育委員会名簿

資料2：東京2020大会の準備状況

資料3：アクション&レガシープラン2017及び東京2020参画プログラムの状況・今後の展開

資料4-1：東京2020フェスティバル(仮称)の方向性

資料4-2：【外務省】2020年東京大会に向けた文化発信の取組

資料4-3：【東京都生活文化局】2020年までの東京文化プログラム展開プラン

資料5-1：東京2020教育プログラムの進捗と今後の方向性

資料5-2：【スポーツ庁】オリンピック・パラリンピック教育の推進について

資料5-3：【東京都教育庁】オリンピック・パラリンピック教育の実施状況と今後の展開

資料6：開閉会式に向けた基本方針

○布村副総長

皆さん、おはようございます。10時になりましたので、第4回目となります文化・教育委員会を開催させていただきます。

冒頭の進行を務めさせていただきます、組織委員会副事務総長の布村です。よろしくお願いいたします。

今回は、約半年あいた開催となりました。去年の夏に開催されましたリオデジャネイロ大会の以降、我々は2020年の大会に向けまして、文化オリンピックをはじめとして、具体的な動きに着手をし、加速しつつあるところでございます。そのような現状についてまず御報告をさせていただいた上で、忌憚のない御意見を賜りたいと存じます。

最初に、本日のメディア委員会の公開についてお知らせ申し上げます。前回と同様となりますけれども、記者の方にはフルオープンという形となります。ムービーの方々には冒頭を撮影いただくということになります。

それでは、開会に当たりまして、組織委員会の森会長から一言御挨拶を申し上げます。

○森会長

おはようございます。諸先生方には、午前中に委員会にお集まりいただきましてありがとうございます。

これで4回目の、今年の最初の会議になるんですね。組織委員会として一言皆様にお礼を申し上げたいと思います。

これまでの会議における委員の皆様からの御意見を踏まえまして、去年の10月から東京2020文化オリンピック、オリンピック・パラリンピック教育プログラムで「よい、ドン！」というのが始まっております。

文化・教育の取組は、スポーツに関わる人や、開催都市の人々だけではなくて、全国どこにおられても、誰もがオリンピック・パラリンピックに参加することを可能にするものでありまして、盛り上げていくための重要な柱でございます。まずは、文化・教育の取組が、オリパラのムーブメントを牽引していくということになるかと思っております。

ここにおりますと、いろんな地域の方々から連絡があったり、お話がございまして、何をやったらいいのでしょうか、私どもとしてはこういうことをやりたいのだが、なんておっしゃいます。それは、組織委員会が文化の行事をどうこうするというふうにするものではなくて、私ども文化・教育委員会でいろんな指針だとか考え方、そういうものは議論いたしますから、各県で、あるいは各市で、各団体で、いろんなことをお考えいただくというのがよろしいんじゃないでしょうかというふうに申し上げているんです。

私自身もわかりませんが、ある時期が来たら、どこへ行っても、寄席に行くといつもオリンピックをやっているとか。オリンピック寄席というのがいいのかどうかはわかりませんが。それもまた文化、オリンピックをPRしていく、強めていくことにもなるのかもしれない。

実は、今日ここにいらっやいます青柳委員長が先週おみえになりました。また榎先生とか、隈先生とか、いわゆる設計士の著名な方々がおみえになりまして、これはお手元お配りしてあります。国立の代々木の競技場がございましてね、あそこは1964年の東京オリンピックのときのメイン会場でありました。それが今もう五十何年たっておりますけども、大事なスポーツのイベントとして使われております。今度もオリンピックでは、ハンドボールをそこで行うはずであります。夏も、最近にぎやかになりましたバスケットのBリーグでありますとか、冬場にはスケート、体操をやったり、ああいうアリーナが少ないものですから、代々木のアリーナは集中的に使われているわけです。

あの建物そのものを、関係の先生方が、ぜひ文化遺産にしたらどうかと、お話がございまして、これについては後ほど青柳委員長から御報告があるかもしれませんが、つまり、これを世界遺産に登録させることによって、1964年東京大会の有形のレガシーを継承していくという、非常に文化的な名望の取組ということになるんじゃないか、そんなこともまたお考えをいただければと思います。

64年の東京大会は、そこに馬事公苑を使い、さらには駒沢競技場等がございました。国立競技場は今改築中であります。しかし、駒沢も環境が関わってきますと、随分いいところにいいグラウンドがあったんですけども、最近は周りに家が建って、なかなか夜は使いにくい。Jリーグの皆さんから、あそこにナイターを自分たちの金でつけるからサッカーやらせてくださいという意見もあるんですが、周辺の皆さんの理解がなかなか得られません。

そんなことで、本当にレガシーとしてこれ残っていくのは、この青柳先生のおっしゃる代々木の競技場だなどと思います。そういうことも、ぜひ先生方のお力をおかりができればなと思う次第であります。

オリンピック・パラリンピック教育は、子どもたちが社会に貢献し、他人を思いやる心を培い、ボランティア精神、豊かな国際感覚など、多くのことを学ぶ絶好の機会であります。子どもたち一人一人の成長により影響を与える、いい機会となるかと思っております。

先般、日本財団とIPC、日本の障がい者スポーツ協会ですが、日本財団は笹川陽平さんのやっつけいらっやいます財団ですが、両方で開発をいたしまして、パラリンピック教材「I'm POSSIBLE」が発表されました。その試作品を見ましたけど、非常に興味深いものが多かったし、子どもたちにとって本当にいい教材になると、思っております。

今日お集まりいただきました、文化・教育分野の第一人者の委員の皆様には、青柳委員長のリーダーシップのもと引き続き御協力いただきまして、各分野におけるオリンピック・パラリンピックへの熱を高めていただきますように、お願い申し上げます。

ぜひ、この機会に幅広い視点から、忌憚のない御意見を賜りますようによろしく願いをいたしまして、開会の御挨拶といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

○布村副総長

引き続きまして、本委員会の委員長でいらっやいます青柳正規委員長から、一言御挨拶をお願いいたします。

○青柳委員長

ただいま紹介いただきました青柳です。どうぞよろしくお願ひいたします。

今、森会長もおっしゃったように、昨年の10月の東京2020の文化オリンピック教育プログラムが、いよいよ「よい、ドン！」ということではじまりました。この「よい、ドン！」という言葉も、実は森会長がおつけになったんですね。すばらしい言葉で、ロンドン大会でも同じような、「よい、ドン！」に当たるような言葉が英語でなされましたけれども、このキックオフ以来、さまざまな取組が全国で広がり始めていると思います。

文化・芸術や教育は国民の一人一人の方々が、あるいは、社会が、あるいは、組織が、満足感や誇り、あるいは自信を担うものだと思います。恐らくスポーツのほうは、より高く、より強く、より早くという競争的なものですが、文化は、その文化・教育の担い手の一人一人の方や、あるいは組織や団体が、自信や誇りを持つことが一番重要なことではないか、そういう意味で、今これから日本の社会の将来の軸になっていくものを、この文化プログラムの中で皆さんが、あるいは、日本全国津々浦々、組織や地域が誇りと自信というものを将来に対して持っていただけることが、この日本の社会にとって非常に重要なことであるし、これからのまさに2020以降のレガシーになっていくのではないかと考えております。

そういう意味で、オリンピック・パラリンピックを契機に、次の世代に今の自信と誇りを持てるレガシーを継承してもらうためのこの文化オリンピックを集大成として、東京2020フェスティバル、あるいは、教育プログラムの全国拡大に向けての議論を委員の先生方からいろいろいただきながら、なるべく充実した、そして、日本の津々浦々にまで広がるその文化・教育のプログラムを、ぜひぜひ御指摘、御指導を願えればと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○布村副総長

青柳委員長、ありがとうございました。ここから先の議事の進行は、青柳委員長にお願ひいたします。よろしくお願ひします。

(プレス 退室)

○青柳委員長

それでは、まず報告事項から入りたいと思います。まず、東京2020大会の現況につきまして、事務局のほうから御説明願ひします。よろしくお願ひします。

○小幡次長

資料2を御覧ください。組織委員会、東京2020年に向けてということで、昨年の動き、また、今後の動きについて報告をさせていただきたいと思ひます。

1ページを御覧いただければと思ひます。昨年は御案内のとおり、リオでオリンピック・パラリンピックが8月・9月に行われまして、私ども関係者も視察をさせていただいているところでございます。

それ以外にも、4月に大会のエンブレムを発表させていただきまして、その後、定着をしてくれていると考えております。7月には皆様にも御審議、御議論いただきましたアクション&レガシープランを公表させていただき、8月には、追加種目ということで5競技、野球・ソフトボール、空手、スケートボード、スポーツクライミング、サーフィンについて追加種目、2020年の東京大会で特別にやるということで決定をさせていただいております。8月・9月にはオリンピック・パラリンピックがリオで行われたということでございます。

10月には、その後、虎ノ門ヒルズのところから銀座日本橋に向けてメダリストのパレードということで、オリンピック・パラリンピック合同で行いましたが、80万人の方に見ていただいたと、非常に盛り上がったパレードになっております。

また、後ほど説明いたしますけれども、先ほど森会長の挨拶にありましたように、文化・教育のプログラムを含む参画プログラムを10月からスタートさせていただきました。

年末には予算のことや、会場の見直しなどで、いろいろ報道もございましたけれども、11月・12月、IOC、組織委員会、東京都、国の4者協議が開催され、年末には予算として、バージョン1の予算、組織委員会の予算5,000億円、また、大会全体にかかる経費が1.6～1.8兆円というような形でまとめさせていただき、公表させていただきました。現在、それに基づき役割分担の議論をしているというのが、今の状況でございます。

また、ボランティアについても、戦略というまだ基本的な部分でございますが、策定し発表させていただいております。

2ページ、3ページに、リオ大会での取組というのを紹介させていただいております。リオでは、ALL JAPANによる日本・東京のPR、また日本選手団の記者会見など、JAPAN HOUSEという形で場所を設けまして、世界に東京の取組を発信させていただきました。

また、3ページを御覧いただきますとおり、閉会式におきまして、オリンピック・パラリンピックそれぞれフラッグハンドオーバーセレモニーということで、パフォーマンスをさせていただいたところでございます。安倍総理がスーパーマリオに扮したパフォーマンスは、サプライズとともに、世界に向けて日本のサプライズを発信でき、非常に好評を得たところでございます。

4ページ以降が、今年以降の主なトピックスでございます。既に、オリンピックの開会式の3年と5カ月前ということになり、いろいろ具体的な動きが始まってきております。それぞれ簡単に御紹介いたします。

5ページにございますとおり、マスコットの選考について始まっております。報道でもされておりますように、マスコットについても公募の形で募集をして、いろんな子どもたちの意見を聞きながら決めていこうということで、今は具体的な、どういう形の選考をするかということ議論しているところでございます。

また、6ページに聖火リレーの検討の開始ということで、今日、午後、第1回目の聖火リレー検討委員会がまさに開催されますが、今後そのコンセプト、ルート策定における基本方針をどうするかということ、具体的に検討していくということになります。

7ページにございます開・閉会式の検討についても、そろそろ始める必要が出てきたということでございます。春ごろには有識者の方からなる式典委員会を設立させていただきまして、そこでどういう基本方針で臨むか、また、総合監督など、演出に関わる方をどうやって選定するかといったことを議論いただき、決定いただく委員会を立ち上げたいと考えております。

8ページにございますが、これはこれまでも理事会でもいろいろ議論してきたものでございまして、「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」ということで、大会のときにアスリートにお渡しする金メダル、銀メダル、銅メダルについて、携帯電話とか小型家電とか、そういうリサイクルで集めて、それをメダルの材料としてつくろうというプロジェクトでございます。

4月以降、回収をスタートさせていきたいと思っておりますので、これを一つのエンゲージメントということで、全国で盛り上げて、大会に向けて一つのきっかけにしていきたいと思っております。

また、今後、こういった取組がありましたら、御報告させていただきたいと思っております。

最後に9ページでございますが、これはボランティア戦略ということで昨年末にまとめたものでございます。ボランティア自体は、大会のボランティアは、2年前の2018年の夏から募集を開始するということで考えておりますけれども、それに向けてやはりボランティアというのは、非常に若い方からお年寄りまで含めて大会を盛り上げていただく、大会を担っていただく大事な方々でございますので、どういう形でこのボランティアの方に募集に向けて集まっていただくか、また、どういうことを担っていただくかということ、これからしっかり議論をしていきたいというふうに考えております。私からは以上でございます。

○青柳委員長

ありがとうございます。実はちょっと順序を間違っただけでシナリオを1ページ飛ばしてしまったので、申し訳ございませんが、議事に入る前に、実は議題2で御議論いただきます、東京2020フェスティバルに関するオブザーバーとして、ニッセイ基礎研究所研究理事の吉本光宏様が今日参加してくださっておりますので、御挨拶をよろしく願いたします。

○吉本氏

今御紹介いただきました吉本です。

日本生命の研究所で文化関係のプロジェクトを担当しておりまして、最近ではオリンピックの文化プログラムを重点的にリサーチ等をしており、ロンドン、リオにも会期中に訪問してリサーチさせていただきました。今、青柳委員長から御紹介ありましたように、今後、東京2020フェスティバルの検討で御協力をさせていただき予定になっております。

ロンドンもそうでしたけど、フェスティバルの成否が文化オリンピックの成否を左右する重要なことだと思いますので、ぜひ組織委員会が中心になって旗を振っていただいて、そのことに微力ながら貢献できればと思っておりますので、どうぞよろしく願いたします。

○青柳委員長

どうもありがとうございます。

吉本さんはロンドンオリンピックのときの文化プログラムを一番よく研究・調査してくださっていただいて、それが我々の今は大変な財産になっておりますので、今後ともいろいろ御指導願いたいと思っております。よろしく願いたします。

それから、本日御欠席の大橋明委員のかわりに代理出席していただいておりますので、御紹介申し上げます。全国連合小学校長会の本間俊様です。

○本間氏(大橋委員代理)

本間でございます。よろしく願いたします。

○青柳委員長

その他の委員の方々につきましては、これまでの文化・教育委員会にしても既に御面識があると思っておりますので、配付している資料1をもってかえさせていただきたいと思っております。

では、東京2020大会の現況について事務局のほうから御説明願いましたので、次の件に移りたいと思っております。昨年、委員の皆様と幅広い議論を重ね、アクション&レガシープラン2016を作成しました。文化・教育分野のレガシーコンセプトに基づいたアクションの動きもあるようですので、御紹介と意見交換ができればと思っております。

まず最初に、全体的な動きと組織委員会の検討状況につきまして、また、事務局のほうから御説明願います。

○小幡次長

資料3を御覧いただければと思っております。1ページ目、アクション&レガシープラン2017ということでございますが、昨年アクション&レガシープラン2016を、2020に向けて何を取り組んでいくか、また、その後にどういうレガシーを残していくかということで御議論をいただいたわけでございますが、これを17年ということで更新作業をしていきたいと思っております。

既に参画プログラムということで昨年の10月からスタートし、この後説明させていただきますが、もう既に東京都、ま

た関係自治体、さらに国でいろんな取組が行われてきておりますので、そういった報告を含めて更新をしていきたいと思っております。また、これについては、この専門委員会でも御議論をいただき、決定をいただければと考えております。

2ページ目でございます。これが先ほど、御説明させていただいております参画プログラムの枠組みでございます。公認プログラムと応援プログラムという形で、公認プログラムというのは、ここにエンブレムがこのマークの中に入っておりますように、国、東京都、関係都市、スポンサーなど、エンブレムが使えるステークホルダーの方々が行うプログラムということでございます。応援プログラムは、それ以外の非営利団体の方々に、エンブレムそのものは使えませんが、エンブレムを切り取った形のこの応援プログラム、マークを使って一緒に盛り上げていただければということで構成されております。

分野が8分野でございますが、文化・教育というのが右の上と左の下にありますように、この8分野の中の中心的な役割を果たす分野となっております。

3ページを御覧ください。現状でございますが、左に主体別認証アクションということで、やはり東京都、また都内区市町村がかなり多くアクションをしていただいております。また、国も多くやっております。課題としては、会場自治体以外の自治体がまだ14%ということでございますので、そういう全国に向けて、全国津々浦々でこういったアクションが行われるように、少し周知をしていく必要があるかと考えています。

また、分野別では、この文化と教育で48%を占めて、まず、ほぼ半数がこの分野でのアクションとなっております。非常にやはり中心的な役割を果たしているということでございます。

教育については、学校認証という形で後ほど説明させていただきますが、東京都教育委員会の力強い取組がありまして、東京都ではもう既に全ての小中高で取り組んでいただいております。ほかの県でも、まだまだ足りませんけれども、徐々に広がってきているという状況でございます。

4ページに、文化オリンピック全体の状況でございます。公認のほうは75件、応援のほうは43件ということで、まだまだこれからという形ではございますが、10月から始まり、かなり多くの自治体でも関心が高まってきているという状況でございます。幾つか事例をその後、紹介をさせていただければと思います。

5ページでございます。キックオフイベントという形で日本橋にて開催させていただいたものでございます。組織委員会、東京都、アーツカウンシル東京、三井不動産の共催でございました。伝統と革新をテーマにしたパフォーマンスということで、かなりの多くの方にお集まりいただき、文化を発信できたイベントとなっております。

また、6ページでございますが、これはさいたまスーパーアリーナで行われました「1万人のゴールド・シアター」ということで、77歳という平均年齢の方々が行う演劇ということでございます。2016年は、これは1,600人の出演者ということでございましたが、将来的には1万人規模の群集劇の上演を目指すということで、かなり大規模なイベントとなっております。ちなみに、演出は故蜷川幸雄さんが行われたということで、そういった意味でも非常に関心高いイベントでございました。

7ページを御覧いただければと思います。これは大学の取組でございます。御案内のとおり芸術の中心である東京藝術大学、松下先生、青柳委員長、関係者が多くいらっしゃいますけれども、東京藝大ということで、学生を巻き込んだ形で、この文化オリンピックに取り組んでいただいているということでございます。こういうやはり大学生の力ということ、若い人の力というのが、この文化オリンピックでも大変大きな力になっていくかと思っております。

8ページでございます。これはアール・ブリュット国際フォーラムということで、滋賀県で開催されたものでございます。アール・ブリュット、最近ではもう非常に知名度も高まってきているものでございますが、滋賀県が非常に最初の段階から力を入れて取り組んでこられたということで、これは青柳委員長も出席されて対談されたと聞いておりますが、こういうアール・ブリュットといったような文化も、この2020をきっかけに広げていくことが大事かと思っております。

9ページでございます。これは日本の伝統芸能でございます。能楽ということで、64年のときにもオリンピック能楽祭というのが開催されたということでございますが、やはり、日本の伝統文化をいかにこの2020年をきっかけに再発見し、また、世界に発信していくということでも、非常に大事な取組と考えております。

10ページ以降は教育でございます。これも教育のキックオフイベントということで、東京都の教育委員会と一緒にやりまして、上野、また昭和記念公園でイベントをさせていただきました。ちょっと天気がよくなかったんですが、多くの子どもたちにも集まっていただきました。

11ページでございます。これはパートナーでありますスポンサー企業の取組、パナソニックの取組でございます。こういう特に教育に関しては、スポンサー企業の取組と一緒にやっていくことも大事かと思っておりますので、今後そのスポンサーに対しても我々の取組に理解をいただき、いろんな形で取り組んでいただくよう、働きかけをしていきたいと思っております。

12ページに、教育プログラムということで学校編でございます。先ほど、森会長の挨拶にもありましたように、「ようい、ドン！」ということでスタートさせていただいております。後ほど詳しく教材などについては説明させていただきますが、オリンピック・パラリンピック教育といっても、単に体育の時間にするのではなく、生活や音楽、国語などなど、さまざまな教科を通じて行うということが重要になっておりますので、そういった取組が今は行われているということでございます。

13ページでございますように、今後、昨年の10月キックオフをいたしまして、2020年に向けて対象も拡大し、広げていきたいと思っております。また、大会のときには、大会直前からフェスティバルという形で、その参画プログラムの集大成ということで、大会に向けて、より日本全国盛り上げていくようなことができればと思っております。これについても後ほど改めて説明させていただきます。

14ページに現状の対象団体がございます。公認プログラムは記載にあるような団体でございますが、応援プログラムは、まだ現在、全国的な団体に限らせていただいておりますので、今年の夏以降、15ページにございますように、市町村、自治会、商店街、体育協会、また連携大学、商工会議所など、そういう団体にも幅広く対象を広げていき、多くの方に参画できるようにしていきたいと思っております。

また、一般財団、社団、NPOなどへ広げる際には、団体がどのような団体なのかときちんと確認する必要もありますので、その確認方法はどのようにしていくかというのが一つ課題となっているところでございます。以上でございます。

○青柳委員長

ありがとうございます。今、2020の現況、それから、文化・教育プログラムについて御説明いただきましたが、委員の先生方からいろいろ御意見をいただきたいと思いますが、何か御意見はございますでしょうか。

今、教育プログラムは、東京都の小中学校は全部入って大変な数になっていますが、これを本当にどんどん広げて、それで、特に九州とか、北海道とか、沖縄とかというところの小学校・中学校も入ってもらうことによって、このオリンピックが自分たちのオリンピックだという気持ちを子どもたちにも持ってもらえるように、ぜひしたいと思いますので、よろしく願います。

それから、文化プログラムではまだ十分じゃないんですけど、例えばですけども、能登半島の一番先に珠洲市というところがございます。そこは地域おこしのために今はお祭りを一生懸命やっているんですが、珠洲市1万2,000人の人口なんですけど、51お祭りがあります。それが5月～10月まで51あって、ですから、もうほとんど毎週ウィークエンドはお祭りがあるんです。

それで、一つ一つのお祭りが、高さ3m以上もあるようなキリコというんですけど、山車で練り歩くんですね。こういうものなんかは、当然この文化プログラムの中に入っていたら、本当に今は地方が大変過疎とか、いろいろ問題がありますけれども、地域の方々が盛り上がり、自信を持ち、誇りを持ってくださるようになるんじゃないか。

委員の先生方はいろいろな分野で、それぞれいろいろ情報等もお持ちだと思いますので、ぜひぜひ御披露をしていただければと思います。よろしく願います。

○松下委員

先ほどちょっと事例で御紹介させていただいた7ページのことなんですけども、少し御説明をさせていただければと思います。

東京藝大でやりましたけども、大学だけじゃなくて、企業の方や、あるいは他大学とか、いろんな分野が一緒になりまして、ちょっと説明させていただきますと、我々のコンセプトが、Sports Arts Science、つまり分離をしないで、オリンピックのスポーツも芸術も、そして今日本の代表とする科学も一緒になって、新しい文化を出していきたい。我々がやっていますから、それを全て交えて作品にしたいと思っていますですね。

左のほうの写真をご覧ください。真ん中に立っているのがスポーツ選手。コシノジュンコさんのデザインで、つまりデザインも入っていただいて、スポーツ選手の体にセンサーをつけまして、その動きがAIで自動的にピアノで音になると。ピアニストがいるわけじゃないんですけど、そのスポーツ選手がまるでピアノを弾いているような。そこにちょっと後ろにいる、演奏家と一緒に、一つの作品を仕上げようということで、今は科学の力と順天堂大学のスポーツと一緒にやったという取組なんです。

そのさらに左のほうを見ますと、最先端の科学のロボットがいて、これも我々の研究している一つです。その隣にいたのが、大伴旅人を再現しまして、つまり日本の文学も一緒にして、いろんなものを取り組んで話を進めていきたいと思ったんです。

右の写真は、これ実は昨年からはじめた試みなんですけども、文化庁の長官もスポーツ庁の長官も何か大変興味を持っていただいたので、それをじゃあシンポジウムにしようということで、シンポジウムも一つの作品に仕上げられないかなと思ひまして、いらしていただいたのは、宮田長官、鈴木スポーツ庁長官、それと、小宮山宏さんと、名古屋大学の水野正明さんなんですけども、舞台上に茶屋につくりまして、一つの文学、日本の歴史的な文学も紹介したいと思ひました。

実は今度は、パラリンピックのスポーツを取り上げたり、オリンピック・パラリンピックに出るスポーツとともに、もっとわかりやすく一つの作品に仕上げたいと考えております。多くの方々が参加できる。もちろん学生も参加しましたし、一般の方も、総合的なものに仕上げたいと思っています。

今後、実は、Sports Arts Science劇場としまして、夏にもやっていきたいという試みでございます。

○青柳委員長

ありがとうございます。ほかに何かございますか。

○セーラ・マリ・カミングス委員

長野からやってきたんですが、長野オリンピックのレガシーの最も残っているのは、一校一國運動だと思っています。長野以降は全てのオリンピックに含まれるようになったんですが。先日、長野高等学校に行く機会がありまして、そこは長野の一番いい学校とされているところですが外国人は1人もいないんです。

どうやって日本人のこれからの人材が、日々の外国人との触れ合いなく育つんでしょうかと、すごく何か寂しく思ひまして。せっかく前向きにオリンピックを迎えることになるので、一校一國運動をもっと拡大した形で、全ての学校に、例えば10%の生徒が外国人を迎えるようにできたら。その予算はどこから来るとか、どうやってやるとか、いろいろな大使館の方々も巻き込みながらやっていけば、実現が可能となるんじゃないかなと思っていますし。そのホームステイも受けられる、インターナショナルな人材が育つことが、オリンピックのすごく意義があることだと思っているので。

そのようなことがこの3年間で可能となったら、すごく若い子どもたちが育つんじゃないかなと思います。

○青柳委員長

ありがとうございます。おっしゃるとおりですね、いろいろ考えてみたいと思います。

○篠田委員

この教育プログラムのところなんですけれども、正直、温度差、都市と我々住んでいるところとの温度差はかなりあります。そこを一緒に盛り上げていくために、私は以前に東京都が学校に対して配布した、オリンピックに関するいろんな資料。あれをぜひ全国で使えるように、何か文科省のほうでも何か御配慮をいただいて、ああいう目に見えるものを子どもたちに配布して、オリンピックってどんなものなのかという辺りを本当に周知していったほうが、やっぱり急にプログラムで何か応援といっても、なかなか熱が伝わりにくいので、あの本をぜひ何か全国で使えるような形で御配慮いただきたいなと思っております。

○青柳委員長

ありがとうございます。東京都からも、ぜひ全国で使ってくれということ。ただ、ちょっと中の著作権とか、写真に何か問題があるので、少し整理しているところです。では事務のほうから少しご説明をお願いします。

○小幡次長

まさに篠田委員のおっしゃるとおりでございます。私も東京都でせっかくなつくついていた教材を全国でも使えるようにということで。ただ、写真に著作権の問題があるということで、少しそこを整理させていただいた上で、今回この4月に教育サイトを我々のホームページで立ち上げますので、そこでインターネットでダウンロードできるようにさせていただきたいと思っております。そういった教材を使って、教育プログラムを各学校でやっていただければなというふうに考えております。

○青柳委員長

ありがとうございます。それでは、まだいろいろ御意見があると思いますが、また後で時間を少しとりたいと思っておりますので、次に移りたいと思っております。

次の議題ですが、議題の2の東京2020フェスティバル、これは(仮称)でございますが、方向性について、まず組織委員会の事務局から説明をいただいて、そして、後で御意見をいただきたいと思っております。よろしくをお願いします。

○中村局長

資料の4-1、東京2020フェスティバル、ちょっとまだ仮称でございますけれども、それについて御説明したいと思っております。

今、小幡次長のほうから御説明ありましたけれども、昨年10月から参画プログラムということで、リオが終わった直後から、全国で文化・教育、あるいはスポーツ、そのほか持続可能性等々の取組をスタートさせていただいております。

冒頭、森会長のほうからありましたとおり、我々としては、組織委員会がいろんなイベントをやるということよりも、これはレガシーと結びついておりますので、東京都であるとか、国であるとか、さまざま2020年以降も残っていく団体が、いろんな文化とか教育とか、そういった取組を行って、それを後押しすると、マークをつくって後押しをするというところを進めて、全国に広げていきたいと思っております。特にその集大成といたしまして、ちょうど2020年、聖火リレーが始まる春ごろからだと思うんですけども、その最後の数カ月をこの盛り上げ、そして、2020年以降に残すものの集大成といたしまして、東京2020フェスティバルと銘打って取組を進めていきたいと思っております。

いろいろ文化芸術だけではなくて、教育であるとか、ボランティアであるとか、スポーツの取組とか、いろいろ広げていきたいと思っておりますが、まずは、文化芸術の分野を中心にしまして、組織委員会のほうでいろんな方々にお声かけをして、まずは取組の球出しであるとか、盛り上げをしていきたいと思っております。

それを踏まえまして、ほかの分野、スポーツであるとか、経済・テクノロジーであるとか、そういったところにも広げていきたいというふうに思っております。

我々が一つ範としておりますのは、ロンドン大会フェスティバルでございます。ロンドン2012フェスティバルということで、ここでは会期は12週間、我々はもうちょっと長目にしようと思っておりますけれども、Once in a Lifetimeということを経験にいたしまして、ロンドンでさまざまな取組が行われたところでございます。

3ページ目に件数や参加人数が載っております。これはオブザーバーに来ていただいている吉本委員がよく御存じだと思いますが、件数につきましては3万件、参加人数も2,000万人ということで、大変な盛り上がりを見せたフェスティバルでございます。

イメージを持っていただくために、ビデオをお流ししたいと思っております。お願いします。ロンドンでの取組でございます。

(映像上映)

○中村局長

このように気軽に参加できてオープンスペースでやるものから、シェイクスピアの劇を各国の言語でやるといったものとか、非常に芸術性の高いものとか、さまざまなイベントが行われまして、ロンドン全体で非常に盛り上がったと聞いております。

我々も全国で参画プログラムでやっていただいている、いろんなこれからイベントがあると思っておりますけれども、そういっ

たものを幾つか重ねる中で、最後の盛り上げを図っていききたいというふうに思っております。

取組のイメージは4ページ目でございます。ここは全くのイメージを持ってもらうための幾つかの例出しでございますけれども、都市空間や、あるいは、日本各地にあります世界遺産であるとか、自然であるとか、文化遺産でプロジェクトをやっていただくとか、パラリンピックの機運醸成、各地域地域の文化資源などを生かしたプロジェクトなども考えられないかと思っております。

5ページ目に移りますと、文化芸術のところだけでなく、それを生かして、「街づくり」や「福祉」や「教育」といったような、いろんな課題を解決するようなプロジェクトも何か考えられないか。あるいは、伝統芸能ももちろんでございますけれども、新たな文化芸術をお披露目するようなプロジェクトであるとか、大会そのものと連動したプロジェクト、聖火リレーと連動したようなプロジェクトが考えられないかというふうに思っております。

基本的な方向性としたしましては、6ページにありますとおり、現在続けております参画プログラムの集大成といたしまして、各自治体や国やスポンサーや多くの芸術団体、文化団体が参画していただくような立てつけにしたいと思っております。

また、東京はもちろんでございますけれども、全国各地で盛り上げたいと思っております。

例えば、同じ時期に行われます聖火リレーがいろんなところを回るわけで、それと連動して、その土地ごとの文化であるとか、伝統芸能であるとか、そういったものとの連動ができないかといったところも、今後考えていききたいと思っております。

また、競技会場、東京にもございますし、関係自治体にもありますし、選手村もございます。そういったところでせっかく来ていただいたということで、日本文化の体験の提供をする場などもできたらなと思っております。これは各自治体などとも、ぜひ連携をとっていききたいと思っております。

7ページでございます。ここは事務的な話になっておりますけれども、やはり参画プログラムのほうはどちらかという、皆様にお手を挙げていただいたものを認証マークをつけるということでございますけれども、やはり、限られた期間、限られた空間でございますので、早いうちから方向性であるとか、あるいは、準備であるとか、予算の確保であるとか、そういった作業も必要だと思っておりますので、WGを設置して、まずは文化芸術のところ整理をしていききたいと思っております。

メンバーでございますが、委員長であります青柳委員長、本日御欠席でございますけれども、金沢21世紀美術館長の秋元さん、本日御出席いただいております吉本理事、そのほか政府、今日もおみえになっております内閣官房、文化庁、外務省、東京都、そのほか地方自治体も幾つかお声がけをしたいと思っております。国際交流基金、アーツカウンシル東京など、具体的に文化芸術のイベントを担ってくださるような方々と、何ができるかといったところを、まずは検討していききたいと思っております。

WGの検討内容は、この委員会でも報告をいただきまして、文化・教育以外にもいろいろな分野がございますので、それを我々にもアドバイスをいただきまして、理事会等にも上げていこうと思っております。

また、分野横断的に東京2020フェスティバル全体をどうしたらいいかといったところ、文化芸術に限らず全体をどうしたといったような検討の枠組みも、今後検討していききたいというふうに考えております。

今後のスケジュールが9ページ目でございます。4月から立ち上げまして、次回7月に予定しております文化・教育委員会のWGでの中間報告をお願いしたいと思っております。また、そのもとで具体化を進めていただきたいと思っておりますし、この文化・教育の中間報告の結果を、先ほど申し上げたとおり、ほかの委員会でも活用をさせていただきたいと思っております。

だんだんと姿が見えてくるのは恐らく来年以降となると思っておりますので、来年以降、横串の枠組みをつくっていったらというふうに考えております。

最後は、本日御意見をいただきたいこととまとめておりますけれども、これに限らず、いろんなアイデアであるとか、こうしたらいいんじゃないか、こうしたら盛り上がるんじゃないかといったことを今日御意見をいただいて、それをまたWGでのキックオフにしたいと思っております。このフェスティバルのビジョンや目標であるとか、どんなプロジェクトを実施したらいいとか、多くのステークホルダーに参画してもらうためには、どのように働きかけをしたほうがいいのか。

もう一つは、やはり、昨日もIPCのクレイバン会長が組織委員会のほうにいらっしゃいましたけれども、いろいろ会長や副会長も御臨席して、いろいろパラリンピックに向けた御説明をいただきましたけれども、オリンピックの閉会からパラリンピック開会の期間、1カ月弱ございますけれども、そういったところで何をやるのかといったところも整理をしていききたいと思っております。そういったものについて後ほど御意見を賜ればと考えております。以上でございます。

○青柳委員長

ありがとうございます。それでは、フェスティバルを見据えた今後の取組につきまして、関係省庁及び東京都からも御説明いただきたいと思っております。まず、文化庁からよろしく願います。

○杉浦臨時委員

文化庁の政策課でございます。

資料はございませんけれども、今、御提案をいただいたことにつきまして、文化庁のほうでも、さらに一生懸命御協力させていただきたいと思っております。

先ほどの映像でもいろいろ出ておりましたけれども、やっぱりちょっと私も気にしているのは、今、御説明もありましたとおり、各地域全国でいろいろやりたいということはどんどん出てくるので、それはしっかりと応援させていただきたいと思っております。と同時に、やっぱり全国レベルで見たときに、大会の近くなったときに、どうやってその大きなこういうイベントなり、いろんな仕掛けをどういうふうにしていくのかというところが、私自身もどうやっていくのかなというのをちょっと気にし

ております。

そう申しますのも、それは政府関係だけじゃとてもじゃなくて無理でして、スポンサーの企業さんもいらっしゃるし、地方もいらっしゃるし、いろんな方々のお力、そして、もちろん文化芸術関係の皆様のお力とか、それをさらにもっとさまざまな社会の方々のお力を頂戴しないと、なかなか結集したすばらしいのができないんじゃないかなと思っていますので、その辺りは組織委員会の皆様と、そして、今日お集まりの先生方からもいろいろお知恵を頂戴して、私どもでもやれることをどんどんやっていきたいと考えております。以上でございます。

○青柳委員長

ありがとうございます。続いて、外務省の下川国際文化交流審議官のほうから、よろしく願いいたします。

○下川臨時委員

2020年東京大会に向けた文化発信の取組ということで、資料4-2を御覧ください。

外務省では、2020年東京大会及び東京2020フェスティバルを見据えまして、日本文化の魅力を効果的に海外へ発信する、そのことを通じて機運醸成を図っていきたくて思っております。

1ページ目にごございますように、世界各国にあります在外公館を通じて、文化発信というものを常日ごろからやっておるわけでごございますけれども、それに加えて、今年、ジャパン・ハウスということで、「オールジャパン」の発信拠点として、新たに、サンパウロ、ロンドン、ロサンゼルスで、このジャパン・ハウスが活動を開始する予定でございまして、

そういったようなネットワークを通じまして、2ページ目にごございますような、各種文化紹介行事というのを、年間、大小合わせますと2,400件ほど実施しております、こういった機会を活用いたしまして、2020年東京大会の意義や重要性というようなことも、あわせて発信していくようにしていきたいと考えております。

それから、3ページを御覧いただきますと、同じくこの日本文化発信の重要な機関といたしまして、在外公館に加えて国際交流基金、これが国際文化交流の専門機関といたしまして、文化芸術交流、日本語普及、日本研究、知的交流など、いろいろと取り組んでいるわけでごございまして、そういうノウハウを生かしまして、大規模な文化事業を海外で展開しているところでございまして、

次のページ、4ページ御覧いただきますれば、その交流基金が実際に実施しているいろいろな事業のほんの一例でございまして、アジアセンター事業を通じましてアジア諸国との事業、それから右にごございますように、これはオリパラに特化して、まさに、日伯共同制作したコンサート等々を、オリンピックに絡めたいろいろな文化発信事業もやっているところでございまして、これから東京2020に向けて積極的に取り組んでまいりたいと思っております。

最後でごございますけれども、最後のページに出ております、日本博というのを今は企画しているところでございまして、これは官邸の主導のもとで、2018年に外務省国際交流基金が中心となって「ジャポニズム2018」ということで、これは日仏友好160周年を記念すると同時に、まさに、そのオリンピックに向けた機運を高めていくという目的も含めまして、パリを中心に大体的に日本文化の発信プログラムということをやっているところでございまして、歌舞伎、能といったような伝統文化から、現代芸術、美術、漫画、アニメ、日本映画といったような、多様な日本の文化の魅力を発信することを検討しているところでございまして、これを一つの2020年へのかけ橋として大いに活用していきたいというふうに考えているところでございまして、

このように、これから2020年ということを見据えまして、それを意識的に念頭に置きながら、文化発信をしていきたいと考えております。

その際には、組織委員会の参画プログラムですとか、それから内閣官房、オリパラ事務局のbeyond2020と、こういった認証プログラムとぜひ連動させていくことによって、一体感を持って進めていきたいと考えておりますので、これからいろいろと連携させていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

○青柳委員長

ありがとうございます。そして最後に、東京都生活文化局のほうから、よろしく願いいたします。

○桃原臨時委員

東京都生活文化局の桃原でございます。私ども東京都といたしましての文化事業の今後の展開につきまして、資料の4-3で御説明させていただきたいと存じます。

東京都といたしましては、開催都市として、2020フェスティバルに向けまして、先頭に立って今後事業を展開していくというようなことを予定しております。その内容について御説明を申し上げたいと存じます。

まず、東京都が中心となって2020年に向けて展開する文化事業全体を、東京文化プログラムというふうに私どもとしては位置づけまして、全体を四つの大きなカテゴリーに分けて展開をしていく予定としております。

まず一番下の青色の部分でございまして、東京の文化振興のいわば土台を支える部分でございまして、都立の文化施設、東京都交響楽団、あるいは、今年度から大きく形を変えました東京芸術祭、上野の「文化の杜」のプログラムなど、さまざまな事業を展開してまいります。

この中で、既に公認の文化オリンピアドとして御公認いただいております東京キャラバンであるとか、障がい者プログラムであるTURNなども充実を図ってまいりたいと考えております。

その上のだいたい色の部分でございまして、こちらは東京都が設置をしておりますアーツカウンシル東京が、民間が行っている事業に対して助成をするプログラムでございまして、今後、助成のメニューを拡充いたしまして、都民が参画可能な地域での文化活動であるとか、海外アーティストの招聘、先端技術と芸術文化の友好プログラムなど、東京文化プログラムの重層化に寄与できるような活動を、さらに強力で支援してまいりたいと存じます。

その上の部分、緑色の部分でございますけれども、2020年に集大成として行われる予定でございます、これまでのお話に出たフェスティバル、こちらを視野に入れまして、新たに展開する事業をお示してございます。

企画公募事業というふうに現在の段階では銘打っておりますけれども、芸術家であるとか、一般の方々、文化団体、その他、多くの方々から企画を公募いたしまして、できる限り斬新な事業、オリンピックならではの文化事業を都が中心となって展開を目指してまいります。この中から2020のフェスティバルの目玉となるようなものが生み出されるよう、今後努力してまいりたいと存じます。

一番上の網かけ、ちょっと網かけが薄く見づらくて恐縮でございますけれども、こちらにつきましては、先ほど御説明のございました組織委員会のオリンピックのマークであるとか、現在、国が中心となって推進していらっしゃいますbeyond2020のマーク、こうしたものを活用して大会の機運醸成を図る部分でございますが、私どもといたしましては、こちらがどれだけ多く展開されるかということが、文化プログラムの成否に関わるというふうに考えておりまして、都といたしましても、組織委員会、国、全国の自治体、文化団体と協力して、この部分の充実を図ってまいりたいというふうに存じます。

今後、文化プログラムの推進によりまして、2020年大会を契機に、一番右側にございますけれども、文化芸術のさまざまなレガシーの創出につながるよう、私どもといたしましても、皆様、先生方等の御意見もいただきながら進めてまいりたいと存じますので、よろしくお願いを申し上げます。

○青柳委員長

ありがとうございます。以上、組織委員会のほう、それから文化庁、外務省、それから東京都の御説明をいただきましたので、ここから皆様のいろいろ御意見をいただきたいと思っております。

特に、資料4-1の一番最後の10ページのところに、御意見をぜひいただきたいということで、箇条書きにしてございますけれども、それに触れる事柄、あるいは、触れなくても結構でございますので、御意見や、こういうことをしたほうがいいんじゃないかというようなことを、ぜひ御披露をいただければと思います。

○今中委員

今朝の朝日新聞で、「オリンピックに聞く」という、割に大きな紙面が出ておりました。内容を簡単に言いますと、トップアスリートの方々が、オリンピック自体に、一般の方との乖離が激しいんじゃないかということが議論されているわけなんです。僕もこれを読んで、ああ、そうだなと思いました。

僕、ちょっとそのときにふと思ったんですけど、このトップアスリートの方々は、テレビ、メディアを通して僕らは認知はできるんですけど、このトップアスリートから漏れた方々、今回のオリンピックでも予選で敗退した方々、団体という方々が、もしも、僕、大阪なんですけど、大阪の難波にいいたら、もし御飯食べて隣にいいたら、どんなにこのオリンピックで近いもの、その親和性みたいなものが感じられるのかなと思ったんです。

そういう意味では、何かトップアスリートの方々も、このような議論もされていますけども、イベント等で打ち上げ花火的にというのにも確かに大事なんですけども、同時に、すぐ隣の人がオリンピックであった、そこから話が沸いてくるというふうな、ちょっと小技なんですけども、フェスティバルほどのことはないんですけども、じわじわじわという意味では、僕は何か一考の価値があるのではないかなと思いつつ新聞を読んでいました。

○青柳委員長

ありがとうございます。よく美術館なんかでもギャラリートークみたいなものがあるって、作者が出て一般の方に話すんですけど、そういうアスリートの方々が我々にいろんなことを教えてくださいと、非常にスポーツに関する興味がより大きくなってきますね。ありがとうございます。ほかに何かございますでしょうか。

○桂委員

少し遅れまして申し訳ありませんでしたが、この日本博(ジャポニズム2018)ののところには、「ジャポニズム2018:響き合う魂」というタイトルのもと、歌舞伎、能・狂言、雅楽等伝統文化からの、雅楽等の中に落語も入ってるんじゃないかと思うんですが、いろいろこういう企画の中で、自治体のほう、また、いろいろな協会のほうから手を挙げて、こんなのかなのか、それとも委員会のほうから、これとこれとコラボしてやってもらえないかと言われるのか、それはどうなんですかね。

○下川臨時委員

今は日本博を準備するための事務局を国際交流基金の中につくっております、そこでいろいろな今は企画の検討をしているところでございます。

それで、伝統芸能というところで、今の段階で落語というのは入っていないんですけども、いろいろな全てができるかどうかというのはありますので、ただ、今はいろいろなアイデアをいただいているところでございまして、その中で何ができるかということを考えていくという形になっている。

それから、このジャポニズムとして、政府といいますか、交流基金が事務局となって主催して行うものと同時に、また、これは参画プログラムと似たような形でございますけれども、この機会にいろいろな団体が行う文化行事というのが、協賛プログラムの形で連携してやっていけないか、そんなようなことも今は検討しているところでございます。

○桂委員

一応、落語も400年の歴史があるので、伝統芸能という中でちょっと網羅して、いろいろ考えていただいて、言葉の

壁というのはいろいろあると思うんですけれども、我々にできることもあるんじゃないかと思っておりますので、御検討をいただきたいと思っております。

○青柳委員長

ありがとうございます。確かに、昔、枝雀なんかがよく英語でもやって、大変な人気を海外で得ているんですね。だから、言葉にも、日本語でもいいし、それから、英語でもやっていただいてもいいし、いろいろやり方はありますよね。

○桂委員

そうですね。同時通訳もありますし、字幕もありますし。

この間やりましたのは、字幕落語とって日本語と英語の字幕を。それは大阪でやったんですけども、東京からそれを送って、ここへ出るようになっていて、こう向いてしゃべったときは、ここに字幕が出てというようなこともやっております。

○青柳委員長

それから、一昨年ですね、梅若玄祥さんがギリシャのエピダウロスで、「オデュッセイア」というギリシャの古代の物語ですけど、そのうちの一つの「NEKYIA」という冥界行という黄泉の世界へ行くところの場面だけを、ギリシャの演出家と組んで、その紀元前四世紀のエピダウロスの劇場で夏に演じられたんですね。そうしたら、経済危機のど真ん中だったのに、劇場がいっぱいになるぐらいに来ていただいて、大変な成功をおさめているんです。

ですから、そういう日本の伝統文化というのは、大変な力が向こうに持っていきとあるということで、ぜひぜひ、このジャポニズム2018なんかで海外展開していただきたいと思っております。

○コシノ委員

早速なんですけれども、昨日パリから戻ってきました、来年ジャポニズムをやるわけなんですけれども。ある意味でキックオフになったかと思っておりますけれども、私、ちょっと今ポスターを持ってきています。

これが昨日22日からパリ中の地下鉄に貼ってあります。国立ミュージアムです、東洋美術館です、やはり東洋と言いつつ、本格的に日本のものをやったのは今回が恐らく初めてだと思います。館長がルーブルから来た方で、とにかく、この計画は私5年前からやっております、たまたまその途中からオリンピックになったので、オリンピックに関すること、その5年前ですから考えていなかったんですけども。

一応、国際交流基金の御協力で、22日オープンです、その前のVIPのパーティーとか、メディアとか、約関係者が500人参りまして、毎日表に並んでいます。本当に大変評判がよくて、日本といえばやっぱり着物を想像して、日本に行ったら着物を着ているんじゃないかとか、京都に行きたいとか、そういう思いというのはずっとあって。特にフランスの場合は日本に対しての文化的な、ものすごく興味が大変あります。特に来年から6月から始まりますジャポニカに関しても、ある意味でキックオフになったんじゃないかと思っております。

これは400年前の江戸から現代までということで、江戸イコール着物は小袖というのがありまして、それが松坂屋さんでも何百点をもって初めて外国に出すんですね。それを3カ月もやりますので、文化庁では一応国宝になった物というのは40日以上は出せないで、2回にわたって展示します。現代は私の作品以外に、フランスの有名なデザイナーも日本の着物に触発された作品ということで、それは現代ということで十何点、その資料をここにお持ちしましたので、御興味のある方はお渡しできます。

それと、やっぱりロンドンですけれども、私の関係者がロンドンにおりまして、ロンドンのレガシーといいますが、あれからどうなったのかということです。オリンピック会場まで行く電車ができましたね。そういう意味で、全く違うところに新しいまちができて、住んでいるのに初めてみたいな経験で、すごく若いまちに、若いというか、そういった流れが急に、戸惑うぐらいにまちが変わったということですね。

そういう意味で、そのレガシーってどういうことなんだろうということなんですけれども、やっぱり、まちが変わったという、目に見える変わり方が実際にあるということもすばらしいと思っております。

じゃあ、日本は、東京は、どうなっているかというと、特別電車ができるわけでも、64年の場合は新幹線ができたわけで、大変大きな功績ですけれども、今はそういうものではなくて、建物ということになるわけですけど、そういうこともちょっと気になるころだと思っております。

先ほどお祭りという話が出ましたけれども、全国日本中にお祭りの数がどれほど多いか、全部言えば、オリンピックをテーマとか、意識して全国やるように文化庁のほうから全国に発生すると、みんなは待っているわけです。何をしたらいいか、それにはマークが使えるのかどうかとか、その辺がちょっと曖昧でよくわからないんですが、それも具体的にやっぱり世界に広める一番いいチャンスだと思っております。

私も五所川原のねぶたをブラジルに持っていったんですけども、やっぱり大変びっくりするような、地方ではすごいお祭りは実際やっているわけですね。

○銭谷委員

2点申し上げたいんですけども、1点が今のコシノ先生のお話に触発されてのことなんです。昨年、私の生まれた秋田の地崎のお祭りが、山・鉾・屋台ということでユネスコの無形遺産に指定をされまして、33のうちの一つなんです。地元は大変盛り上がりまして。毎年のお祭り、今年どうなるか、今から心配になるぐらい盛り上がりしているんです。ぜひ、そのフェスティバル、東京文化プログラムのときにはですね。

私、日本はやっぱり今コシノ先生がおっしゃったように、お祭りの宝庫だと思うんですね。大変すぐれた、また、ずっと

続けられている無形の遺産がたくさんあるわけですので、この野外でやるということも含めて、こういうお祭りをぜひその中に参加できるように取り計らっていただきたいなど。

特に、最近、文化庁で日本遺産ということで、オリンピックまでに100ほど日本遺産を認定しようということで、大変頑張っておられるんですけども、これも各地域をつないだ遺産とか、その地域の遺産とか、いろんなカテゴリーがあるようでごさいますけれども、こういったものがうまくこれに組み込まれるようにしていただければ、非常にいいんじゃないかなと。やっぱり、野外というのは非常に盛り上がると思うんですね。それが1点でございます。

それからもう1点ですけども、これは博物館の立場からちょっと申し上げるんですけども。今、私ども博物館の世界は大変インバンドが多くなりまして、例えば、多言語化とか夜間の開館とか、いろんなことを内閣の御指導もいただきながら努めてやっております。

私が今おります上野の国立博物館は、上野の文化の杜ということで、上野地区全体が、上野公園一帯がそういうインバウンド対応をしっかりとやって、上野全体での文化的な環境を整備しようということで取り組んでいるんです。

その際にオリンピックに向けて、一つ、beyond2020というのがありますね、それからもう一つは、この東京2020応援プログラムというのがありますけれども、お願いは、ぜひ、どちらもよく広報を、PRを大いに積極的にしていただいて、参加しやすく、どうやったらマークをもらって、ぱっと打ち出せるのかというのが、みんな今は博物館の関係者は関心がございます。

とりわけ、2019年の秋には、京都で博物館の世界大会を実は予定をしております、それに合わせてまたいろんなイベントも、ちょうどオリンピックの前年になりますけれども、前年ということで、その時期にやろうということにもなったわけでございます。各博物館はみんなこの東京2020応援プログラムに参加したいと、こう思っているところは多いと思いますので、ぜひ、どうやったら認証していただけるのか、その辺のわかりやすさを、これからお願いをしたらなというふうに思っております。

○青柳委員長

今、お祭りはもう当然ですが、2番目のほうのそのいろんな博物館や美術館が積極的に参加できるように、いろいろキャンペーンを事務局のほうでも張っていくと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

それから、先ほどコシノジュンコさんがおっしゃったように、たしか、以前、パリのギメで魯山人をやりましたよね。

○村田委員

はい。文化遺産登録のロビー活動として、7月と8月と2カ月間、日本料理と魯山人という催しをギメでさせていただきました。

この度、森会長にもお世話になっているんですが、文化芸術振興基本法の中に、この国会中、もしくは次の国会で、食が文化の粋の中に入れていただけることになりました。これは食の議連138名、山東先生、林芳正先生なんかを中心につくっていただいたんですけど、それを中心に文化芸術振興法は議員立法ですので、議員さん連中とお話させていただいて、この国会中に何とか食が文化の粋の中に入るということで。

これを見せていただくと、文化・教育の中にも食というのを非常に少ないので、何とかもうもっとたくさん使っていただきたいなど。

この2018年、2019年に世界料理学会、サンセバスチャンとか、マドリッド・ヒュージョンとかというのをやっていますけれども、東京2020に向けての世界料理学会、大体2万人ぐらい、それから、アジアからの料理人の選手というのが、ヨーロッパで行われる料理大会では少ないのです。今、アジアの料理の中心はやっぱり日本になっていますので、それを何とかやりたいなど。これは全日本食学会と日本料理アカデミー、ほかのTOWとか、ぐるなびさんからの資金で、これをやりたいというふうにも思っております。

今、国連5カ国語で日本料理大全をつくっております。全10巻で今は3巻目までできましたが、それをオリンピックまでに全巻を完成させたい。

京都は平安神宮辺りを中心に、その博物館のときと連動して、京都・食のフェスティバルという、それから、第一次産業の方とその加工業者と、それから料理屋というような京都市全体で大規模な神宮道を全部屋台村にして、その京都・食のフェスティバル2020を催したいと思っています。

再来年ですか、世界日本料理コンペティションを、それから、EU内の中心はUKで、アメリカ内の中心はニューヨークで、アジアの中心は韓国で予選を行い、本大会を京都でやるということは今を進めております。

文化庁もちょうど京都に来ますので、いろんなことをやっていかないといけないので、それらもみんなオリンピックに向けての食の活動でございます。

○青柳委員長

今のお話を聞いて、平安神宮の通りには、京都国立美術館と、それから、こちら側には市立美術館がありますから、そういうものと一体になってやれば、ちょうど秀吉の時代の聚楽第を中心としてやった大茶会みたいなものができそうですね。そういうものができるととてもおもしろいと思いますね。

○真田委員

「本日、御意見いただきたいこと」の中なんですけれども、オリンピックの閉会からパラリンピックの開催までに実施すべきプロジェクトということで、ちょっと提案したいと思うのですが。

これはやはりオリンピック・パラリンピックということで、両者をつなぐインクルーシブなイベント、これを文化的な面でも、あるいは、スポーツや教育の面でも実施すべきかなと思っております。

例えば、私どもリオデジャネイロで、ちょうどオリンピックが終わった後に駅伝をやったんですね。国際陸連と、それから現地の陸連の協力を得て、駅伝をやってみました。その駅伝も、これは極めて日本的な文化ですから、それを障がいのある人、ない人、それから高齢者も、若者も、さらには男女はもちろんですし、アスリート、トップアスリートの方と、それから一般の方とですね、全部含めてグループにして、日本からたすきを持って行って駅伝をやってみたんですね。結構受けまして、そういうインクルーシブなものをこの期間にやるのが非常にいいのかなという、そういう思いを強くしてまいりました。

そういう日本の文化、駅伝というのは極めて日本的なスポーツ文化ですので、そうしたのも、武道のみならず、そうしたのも発信をしていくという機会がいいかなと思いました。

○田中委員

フェスティバルのコンセプトとしては、もう今まで皆様からいろいろ議論があったように、この日本の伝統的な文化とか歴史を、日本の我々産業界が世界に誇れるような、そういうテクノロジーで、いかに世界の方に発信できるかというのがコンセプトの中心になったらありがたいなと思います。

当社、前にも御紹介しましたように、企業理念としては、共生、ともに生きるというあれを使っておりますが、オリンピック憲章の中にも、やはりこの人間性の普遍性を尊重するというような言葉もございますので、人間のきずなとか、つながりというのですね、こういうのをテーマにしたらいかがかなということでございます。

具体的な手段としましては、今はいわゆる映像とか、ディスプレイとか、あるいは、我々が手がけております写真とか、いろんな手段がございます。したがって、この辺をうまく活用すればと思います。

ちなみに、この会議場の外に写真を今掲載させていただいておりますので、後から見ていただければ、その写真の訴える力というのを実感していただけるのではないかと思います。以上です。

○杉野委員

本日の検討の項目の中で、この東京2020フェスティバルの中で実施すべきプロジェクトというところがございますが、これからWGで検討されるということなんですけれども、一つ取組のイメージの中で、福祉とか教育などの課題解決型プロジェクトということで例が挙がっております。

実は、私は先日、ある都立の特別支援学校のほうへ伺ったときに、向こうの校長先生が給食をやっているんですね、特別支援学校は給食があるんです。自校でつくっております、世界の食をいろいろ給食のメニューに取り入れて行っているんだと。障がいの重い子も軽い子もいろいろおりますけれども、やはり食べるということがね、先ほども話題になっておりましたが、どうしても人間というのは興味・関心は一番持っておりますもので、そういう食事を通して世界の様子を知るんだというようなことを広げていっているということをおっしゃっていました。

こうやって身近に、いろいろ教育というのは非常にすそ野が広がりますので、先ほどもありましたけれども、いろんな教科や科目の中で取り扱うということができているわけですし、恐らく私が知ったのは本当に氷山の一角だと思います。いろんなところで、いろんな取組をなさっていると思うんですね。ぜひ、その情報発掘といましようか、各地域とか、学校とか、特別支援学校の教育も含め、小・中学校も含め、そういう活動の特色的なものを発表する機会というのを設定していただければと思うんです。

それで、これは一つお願いでもあるんですけれども、今、子どもたちが自分の考えをちょっとまとめて発表させるというような、アクティブラーニング的な授業の形態も大体の学校も取り始めておるんですけれども、やはり小さな子どもが、自分が行っていることを体験的に限られた時間の中でわかりやすく話すというようなことを、一つ勉強のテーマとしてもつくれると思いますし。

逆に教える側の先生方も、やはりかなりそういう工夫を凝らして、日々の授業に取り組んでおられるわけですので、私はこういう工夫をして子どもたちの主体性を引き出したんだと、それが一つのオリンピックの教育を通じた教育の遺産だということですね、レガシーだということところが誇れるような、発表の場もお願いできればと思うんです。

と同時に、今は子どもの育児の問題でも、かなり難しい問題が、報道等も上がっておりますけれども、やはり若い子育てのママさんとか、あと福祉施設の職員の皆様方。この間ちょっと社協の研究会等も私も出まして、非常に熱心に福祉職の方も取り組んでおられます。これは障がいのある施設の方の発表でもあったんですが、高齢者の施設の職員さんも当然いらっしゃるわけでしょうから、そういう福祉関係の方も、このオリンピック等をもし取り組んでおられる活動があれば、ぜひ、そういうものを発表させていただく機会があれば、広がるんじゃないかなというふうに思っております。

○小山委員

私のバックグラウンドはバレエなんですが、パフォーマンスアーツの世界にいる人間も、このオリパラの機会にぜひ何かをという気持ちは、皆そろって持っていると思います。

まず一つは、日本で作り得る最高の舞台をつくりたいと、これを目指すのは自然な流れかとは思いますが、バレエの世界では今はコンクールで非常に優秀な成績をおさめても、ほぼ100%海外に出て行ってしまっている、才能の流出が行われているところで。このオリンピック期間というのはちょうど夏ですので、そうした海外に行っている日本のすぐれた人材を集集させるということが可能なのではないかと、本当に力を集めることが可能なのではないかと。

そこからさらにインクルージョンも、これはこの機に我々が取り組むべきことだと思っていて、そういうトップだからこそ、そうしたインクルージョンの活動、例えば、これもイギリスなどでよくやられているようですが、リラックスパフォーマンス、障がいを持たれた方も気楽に見られるような敷居を下げた、だけれども質の高いものをというのを皆で楽しもうじゃないか。

それから、例えば、もっとそこを進めていくと、全国にいるバレエ教師たちが、全国1,004の日本の特別支援学校、

舞踊の教育をしようと思っても、特別な人材がないという現状だということも伺っていますので、そういうところに派遣することも可能なのではないかと。

バレエはお稽古事文化というのを土台に発展して、昨年の全国調査でも全国に35万8,000人の学習者がいる、それから1万5,000人のバレエ教師がいるという現状が把握されていますので、そうした人材をこの機に埋もれさせずに活用させるということも、本当にこの機会だからこそできるのではないかと。それがそのままレガシーとして今後に残る形で、パフォーマンスアーツの世界も発展とともにつくっていただければいいなと思っています。

○野村委員

ちょっとずつ思ったことを申し上げますと、仮称と書いてあるので、このフェスティバルの名前ってまだ決まっていなくていいんですね。やっぱり、地方を全国津々浦々公演していると、東京のことだろうというふうにやっぱり思われちゃうんで、東京2020は当然残さなきゃいけないんですけど、オールジャパンフェスティバルとか、もうちょっとほかの東京でない人も含まれている感じに、オールジャパンフェスティバルとかとしたほうが、何となく入りやすいというのは単純にあると思います。

とにかく、皆さんそういうのを盛り上げるためには、本当に就労時間とか、いろいろあります。ロンドンがうまくいったのは、やっぱり彼らは非常に生活文化大国というか先進国なところがあって、もうNine to fiveで5時には絶対にやめちゃう人たちですから、その後の余暇をどう楽しむというのと、今問題になっている残業日本国とですね、もうスタートラインが違う。ですから、いろんな意味での法整備、インフラ含めたことからやらないと、幾ら声をかけても、みんな足も手も出ないということがまず言えるのではないかと思います。

そういう意味では、例えば、2020年の春から夏にかけては、皆、就労時間は4時までとかぐらいにしていかなないと、もしかしたら何も起こらないという大変だけれども、そういうほうが盛り上がるということがあるかと思いました。

それから、今、各界の著名な先生方のいろんな御意見を聞いていて思ったのは、そういうフェスティバルをするときに、もちろん自由参加もあるんですけど、ある種のひな形をつくってのコンペティションというものをするとやっぱり盛り上がる。自由演技ばかりやって、好きなことしかやらなくて競争原理がないと、適当に終わっちゃうんですよ。ですから、ある種、ひな形のあるちゃんとした、それこそフィギュアだってそうじゃないですか、ショートとフリーとあるじゃないですか。一種のショートプログラムに匹敵するようなものをつくって、それを全国各地でやって、その上位、優勝者がそのオリンピックの期間やるとかというようなことを含めたやり方で、全国規模に展開すると、非常に競争原理が働くのではないかと思います。

そうしたときに、地方にそれぞれ、囃子も出身の方がいらっしゃるとか、役者だって、バレエダンサーだって、それから、お花の先生だっていらっしゃるでしょうというふうな方たちが、それぞれそのひな形に沿ってやる。

例えば、会場までの入り口の通路をお花で飾るのか、茶会にするのか、また、そこに屋台が並ぶのか、そして、その奥にまた弁士のような人がいて、それからの祭りを誘導していく何か事があり、そして、そこで何かパフォーマンスが起こるといって、いろんな形のパフォーマンスが考えられるのではないかと。

私、不肖ながら、モーショキャプチャーというので、この間、ゴジラというのをやったんですよ。シン・ゴジラという映画が有名になりましたが、あのゴジラは僕がやっていたんですよ。私の関節にいろいろマークをつけて、それをコンピューターが読み取って、それこそゴジラの動きは私の関節の動きを再現させていると、そういうようなことがあったりするわけです。

例えば、そのお祭りというのが先ほどから話題になっていますけれども、その祭りというものを、例えば、モーショキャプチャーとか最新のテクノロジーで解析し、それをまた次なる何かにして見せるとかという、一種の構成なりをあるひな形として提示することで、そこにはめて、それぞれの国の意識、またはその歴史、自分たちのアイデンティティに根差すものを反映していくというようなこと。それを総括していくと、やがて日本というものの姿が見えてくるみたいな、ちょっとそういうことを私はつらつらと考えました。

また、それから、例えばパラリンピックも考えると、そういうテクノロジーを使って、一種ハンディキャップであることを、例えばモーショキャプチャーで埋めることができちゃうりする体験を障がい者の方ができるのか、または、逆に健常者というんでしょうかね、人たちが、そういうハンディのあることを体験するとかというようなことも考え得るのではないかと。

○青柳委員長

今、いろいろいただいた意見は、事務局のほうで、またWGのほうでいろいろ検討して、次回お示ししたいと思います。では、次に議題の3に移らせていただきまして、東京2020教育プログラムの進捗と今後の方向性について、まず事務局のほうから御説明をお願いします。

○小幡次長

資料5-1を御覧いただければと思います。教育プログラムの進捗と今後の方向性ということで、先ほどの説明と繰り返しになる部分もございまして、簡潔にさせていただきたいと思っています。

2ページを御覧いただければと思います。教育プログラム全体の概要ということで示させていただいております。幾つか枠組みがありますが、教育プログラムは大きく分けまして、学校そのものを認証するやり方と、あと、いろんなステークホルダーや大学がやるプログラムを認証するやり方と、この二つがあるということとございまして。

一番メインになるのは、この学校を認証するやり方で、オリンピック・パラリンピック教育を広げていくことかと思っております。3ページにございますように、全国の小・中義務教育学校、中等教育学校、高等学校、特別支援学校と対象にさせていただいているところでございます。「よい、ドン！」という名称のもと、「よい、ドン！スクール」という学校

を全国に広げていく形で、また、マークを使っていく形で全国に展開していきたいということでございます。

具体的には、4ページ以降にございますように、既に認証の受け付けを始め、先ほど説明させていただきましたように、東京都内の学校を中心に、既に2,473校の学校を認証しているところでございます。

今後そういった学校には、別途紙を用意していますが、認証書というのを各学校には送らせていただきたいと思います。こちらですね、このマークをつけた、学校にこういった形で張り出していただくと、ありがたいなと思っております。

また、先ほど話も出ていますが、教材を今後、組織委員会のウェブサイトに乗せる形で、いろいろ活用していただきたいと思います。具体的には、5ページ以降でございます。

先ほど、クレイバン会長、IPC、国際オリンピック委員会の会長が来日されていまして、今週の火曜日に発表されましたけども、「I'm POSSIBLE」という国際オリンピック・パラリンピック委員会公認教材というものを製作いたしまして、発表いたしました。これは参考資料で、記者発表資料ということでお配りさせていただいておりますけども、日本パラリンピック委員会が日本財団パラリンピックサポートセンターなどと連携してつくったものでございます。

これのすばらしいところは、普通、外国の教材をそのまま日本語に翻訳しても、なかなか日本の学校で使うのが難しいことが多いんですが、これは日本の学校の先生がこの教材の開発の段階から入りまして、教師用のハンドブックとか、そういう授業用シートとかを含めて開発されたものでございます。

パラリンピックとは何なのか、とかということから、シッティングバレーボールやゴールボールを実際に体験するようなプログラムになっておりますので、我々の組織委員会にもこれを載せさせていただいて、パラリンピック教育というのを前面に出して広げていきたいと思っております。

また、6ページ目にありますものが、先ほど篠田委員からご質問がありまして、少しお答えさせていただきましたが、東京都教育委員会のほうで、既に教材を作成し、全ての学校にお配りしているものがありますので、これを組織委員会と一緒に連携して活用させていただき、写真をインターネット上でも使えるように更新した上で、4月以降、組織委員会のウェブサイトにも掲載して、全国の学校で活用いただきたいと思います。思っております。

また、IOC、オリンピック委員会のほうでも教育プログラムというものをつくっています。これについては真田委員などいろいろ研究されておりますけれども、これについても今後引き続き、日本で使えるような形で翻訳等した上で、ウェブサイト上で掲載していきたいと思っております。

こういう形で教材を含めて、さまざまな形で取り組んでいただきたいと思います。思っておりますので、7ページにございますように、今後は広報活動ということで、できれば委員の皆様にも御協力をいただきながら、学校などでの活動や取組をしていく。

また、表彰ということで、ゴールド、シルバー、ブロンズ・スクールというように例示させていただいておりますが、一生懸命頑張っている学校を、ぜひこういう形で取り上げて、組織委員会からも発信して、やりがいを持って取り組んでいただけるようにしていきたいと思っております。

○青柳委員長

次に、スポーツ庁のほうからよろしく願いいたします。

○勝又臨時委員

お手元の資料5-2に基づいて、スポーツ庁の事業について御説明させていただきます。

全国展開事業ということでございまして、今、国会で審議していただいている予算案の中に、今年は2億6,000万円ほど盛り込ませていただいております。全国にいかに関係していかっていくかということでございまして、左側を見ていただきますと、27年度から進めている、27年度は調査研究という形で、真田先生の筑波大学に御指導をいただきながら、先行的に宮城県、京都府、福岡県で行っております。

この事業の予算を確保しているわけですが、例えば、先生向けのこういったオリパラ教育をやるかということのセミナーを実施する経費だとか、それから市民向けのフォーラムを開催する、あるいは、オリパラ教育推進校へのオリンピック・パラリンピアンへの派遣とか、そういったものを国で支援するというような予算の確保でございます。

28年度は、これを2府10県に全国展開という、28年度から全国展開という事業名に改めまして進めております。

これを29年度、この3日になりますけれども、今までは特に筑波大学さん中心、大学の指導を中心にやってきたのを、この29年度の展開という予定の中で、都道府県の教育委員会とオリパラ推進校、この真ん中より下のここが中心となって、より仕事をさせていただき、たくさん地域、学校でオリパラ教育が進むように、スポーツ庁、それから、組織委員会、そしてまた関係団体、これは大学のほか、JOCさん、JPCさん、それからパラリンピックサポートセンター、こういったところが支援して進めていくということを予定しております。また、やることは先ほど申し上げたような先生向けのセミナーだとか、それからパラリンピアン・オリンピックの派遣の支援ということでございますけれども、こういったことを進めていこうと思っております。

28年度は2府10県ということでございましたけれども、29年度は20以上を目指して、特にその大会を開催する自治体、あるいは、その東日本大震災の被災地、こういったところではぜひとも展開できるようにということで、今はスポーツ庁から各県の都道府県教育委員会に働きかけ等を進めているところでございます。

それから、それに関連してということでございますけれども、2ページ目でございます。ただいま、ちょうど学習指導要領の改定の作業を今は文部科学省のほうでしております。この中で、左側が現行の学習指導要領のオリンピック、実はオリンピックしか記載がございませんが、記載でございます。小学校の社会と、それから中学校の保健体育のところでございます。

これを今度の改定案では、オリンピック・パラリンピックというようなオリパラ並立の形にして、また、小学校の体育の

ところでも拡充し、また、中学校の保健体育のところでは、スポーツの意義、価値、こういったことについてもしっかり明記するというような形の改定案でございます。

現在、パブリックコメントを実施中でして、今年度中に改定をいたします。

ただ、学習指導要領自体は教科書検定等もしなきゃいけないということで、全面実施は2020年度から小学校、中学校は2021年度からということでございますが、この考え方自体は学校のほうで生かして、オリンピック・パラリンピック教育を進めていただきたいというところでございます。

それから3ページ目でございますけど、先ほど「よい、ドン！」について、各地方での認証の状況について組織委員会さんのほうから御説明がありました。

先ほど私どもが申し上げたオリンピック・パラリンピック教育の全国展開事業を行っている学校ということで、東京都以外では進めさせていただいております。来年度、少なくともスポーツ庁のオリンピック・パラリンピックの全国展開事業を進めている学校について、この「よい、ドン！」の認証をいただくような形で連携して進めていきたいと思っております。

4ページ目、5ページ目はこれ事例になりますけど、時間の関係もございまして、御覧いただければと思います。

○青柳委員長

ありがとうございます。それでは、最後に、東京都教育庁のほうから御説明をお願いしたいと思います。

○堤臨時委員

それでは、資料5-3に基づきまして御説明をさせていただきます。

表紙をおめくりいただきまして、まず、東京都教育委員会の方での教育の現状でございますけれども、今年度から全ての公立学校で、2,330校でオリンピック・パラリンピック教育を先行実施しております、先ほど来、出ておりますとおり、11月には教育実施校ということで認定・認証をいただいているところでございます。

都教育委員会の基本的枠組とありますけれども、四つのテーマに四つのアクションを掛けるという形を枠組みといたしまして、その中でもその下にございまして、重点的に育成すべき5つの資質ということで、特にボランティアマインドをはじめとした5つについて、重点的に取り組んでいるところでございます。

次のページ、本年度の取組の状況でございますが、各学校が年間35時間を目安にいたしまして、教育活動に位置づけて実施しているところでございまして、これも先ほど来、お話が出ておりますけれども、特定の教科に偏ることはなく取り組んでいるところでございます。

また、先ほど杉野委員からお話ありましたとおり、学校活動の中で、その学校の特色に応じて進めているようなところもございまして、幅広く教育活動を展開するように推奨をしております。

それから、四つのプロジェクトということで、東京ユースボランティアから世界ともだちプロジェクトまで、先ほど5つの資質の肝要のことを申し上げましたけれども、こういう四つのプロジェクトに代表されるような形で進めているところでございます。

その下の丸でございますけれども、これも先ほど来、御紹介いただいておりますけれども、学習読本等を都教育委員会の方から配布をしましたり、また、先進的に一昨年度、昨年度と先進校ということでしておりますので、学習活動がかなり、先進事例が蓄積をされてきております。そのようなものをウェブサイトの中で紹介するようなことをしております。

また、これも進めてきてわかったことなんですけど、先ほどもお話出ておりましたけれども、例えば学校と外部団体をつなぐつなぎ方が学校ではよくわからない。こういうことをやりたいんだけど、どこへ聞いたらいいかわからないというようなお話があったり、逆に団体さんからしても、学校からばらばらとお話が来ても対応し切れないということもございまして、そのコーディネーター機能というのが非常に重要なんじゃないかということで、こういうコーディネート事業をしながら、学校と外部の皆様とのマッチングを進めているところでございます。

4ページを御覧いただきますと、来年度これ今は予算審議中でございますので、私どもの今審議中においております、案の取組の典型的なものを3つ掲げさせていただいておりますけれども、まず、私どもは表彰制度というものをつくりたいと思っております。

ただ、これも東京の場合も都心から西多摩、島しょまでいろんな学校がございまして、表彰制度がイコール学校の格付けみたいになっちゃいけない。青柳委員長が冒頭におっしゃったとおり、全ての子供が関わっていかなくちゃいけないということもございまして、先ほどの組織委員会さんの表彰制度と同じように、私どももこういう表彰をつくりながら、ただ、例えば先行している学校のいい事例をどんどん、どんどん紹介してもらうような形で、その表彰を活用していかないかというふうに考えております。

それと、2番目でございますけれども、ボランティアが非常に重要だと考えておまして、中高生の自主的なボランティアを促進する登録制度をつくりたいというふうに考えております。その中から多様なボランティア活動を都内の中高生に体験してもらいたいというふうに思っております。

最後でございますけれども、障がい者スポーツの振興ということで、小中学校を10校を指定いたしまして、なかなかパラリンピック競技を見る機会がない、情報もないということもございまして、体験ですとか観戦等を計画的に実施する応援校としてつくっていきたくて考えております。

また、ポッチャが非常に障がい者スポーツの中では、障がいの有無に関わらず、また、年齢に関わらず取り組める競技だということで、ポッチャを一つの典型事例といたしまして、「ポッチャ甲子園〈東京都版〉」、これ仮称でして、ちよっと名前は多分変わることになると思っておりますけれども、そのようなものを実施いたしまして、なお一層、進行を図ってまいりたいというふうに考えてございます。

先ほど、篠田委員からもお話ありましたとおり、ぜひ、東京のこういう取組を東京都自身も全国も発信してまいりたいと思っておりますし、また、組織委員会の力をおかりして、私どもの先進事例をぜひ活用していただけるように取り組んでまいりたいと思っております。よろしく願いいたします。

○青柳委員長

それでは、今、教育関係について説明いただきましたので、この教育関係について何か御意見をいただければと思います。

○深澤委員

まず一つ、御質問ですが、スポーツ庁さんの御説明の中の3ページのところで、東京以外の学校の認証がございしますが、特に高等学校を中心に見ますと、この京都が非常に多いんですが。この京都は、何か京都市が指導して取り組まれたプログラムを結果として認証していらっしゃるのか、あるいは、各高校が独自のプログラムを、何か取り組まれたことを、それを受け止められて、こういう認証をされたのかということについて、御質問したいと思います。

○勝又臨時委員

京都府さんが、これは特に真田先生の御指導、筑波大学さんの御指導で、特に地域性を生かして、京都の歴史、何か短歌をうまくオリンピック・パラリンピックを盛り上げるために、みんなで考えようとか、そういうプログラムを京都府さんの教育委員会さんが指導されて、そういった形でこの高校の認証が多くなっております。

○深澤委員

ただ、次の取組事例の例えば綾部高校は、全く違いますよね。この水泳とか、温水プールを使用している。これは京都市が音頭をとられたのか。これを10月以降、各京都府内の高校がたまたま、それぞれいろいろな取組をしたことを、こういうふうには認証されたのか、どちらが主導だったのかということをお聞きしたいです。

○勝又臨時委員

両方のパターンがあります。

○深澤委員

両方なんですか。わかりました。

もう1件は、幾つかお話をいただいたんですけども、残念ながらちょっと今日の資料の中には、大学というワーディングがほとんどないことなんですね。もちろん、現在の大学生は既に2020のときには社会人ということではありますが、いよいよ今年の入学の1年生が3年後、オンタイム、4年生です。恐らくボランティアを中心に大学生が主体的に関わっていかなくちゃいけないんだと思うんですね。

もちろん、今日の御案内のいろんな文化等々について課題もあるでしょうけれども、ボランティアについては大学生の力も要るでしょうということ、やはり、この小中高と大学をどうつないでいくかということが、一つのキーポイントになると思います。指導要領も変わることもあって、小中高の先生は相当これから大変な時期を迎えると思いますが、オリンピック・パラリンピックの文字も入りましたし、それから、新しくキャリア教育という視点も、かなり明確に学習指導要領に入ってきます、小中高まで。

ですから、そういった一連の取組の中で取り組まれたことが、大学につながるように、2020後、ポスト2020後も含めて、この若い人たちが日本を支えていくという意味で、決して2020だけがゴールではないんだということも含めた、一連のこの小中高大までつながった取組をやっばりすべきだと思います。そういう意味では、大学のいろいろな取組についても包括していただいて、そして、それを小中高につなぐような流れも一方では必要なんじゃないかなというふうに思いますので、ぜひよろしく願いしたいと思います。

○中村局長

深澤委員、ありがとうございます。大学につきましては、この4月からまず連携大学に参画プログラムの仲間に入っただきまして、7月からはより多く、そのほかの大学や大学院、短大、高専なども、この参画プログラムの輪に入っただきこうと思っております。

○青柳委員長

確かに、ロンドンオリンピックのときも大学は非常に重要な役割をしていましたので、吉本さんたちと参考にしながらWGで、どういう協力をお願いするかということも考えていきたいと思っております。ありがとうございます。

○セーラ・マリ・カミングス委員

この認定は、東京都が京都が中心になってもいいと思うんです。ただ、オールジャパンの位置づけが最初の一番東京のオリンピックの魅力だと思うので、やっぱり、東京都とか京都ではもう大都市化しているし、異文化も受けられているところですが、地方のほうが本当はこのオリンピックをとっても必要としている。

このチャンスは待たないですから、例えば、遅れ遅れに地方に流れていくことだと、もうあつという間に3年がたっつてしまいで、せつかくのチャンスを失ってしまつてほしくないと思っております。今、高等学生とか、上の子どもたちがボランティアとしてはいいと思うんですが、若い人たちが一番柔軟性があるから、保育園のときから、小学校、中学校が

一番本当の、これからの人材がつかれる大きなチャンスになるので、どうか、こうした認定がもっと本当に毎日のイベントだけでなく、日々の生活がお客さんを受けられる、もてなしのできる舞台となるように頑張っていきたい。

地方にいながらも、こういう席に来る立場に恵まれても、本当にかけ橋になって皆とつなげていけるようにしたいと思うので。本当に先ほど、どうやって学校に、誰に声かけていいとか、どこにやっていいとか、本当に時間がなくなってきているので、仕組みがおりてこないなら、地元から上がっていくことしかできないのかはよくわからないけど、どうかお願いします。

○青柳委員長

それでは最後の議題で、開会式、閉会式に向けた基本の方針について、まず事務局のほうから御説明をお願いします。

○中村局長

資料の6を御覧いただけますでしょうか。開閉会式でございます。冒頭に小幡次長のほうからありましたけれども、この春からいよいよ本格的な検討に入りたいと考えておりまして、それに向けまして各委員会、文化・教育委員会の方々から御意見をいただくかということでございます。

まず、オリンピック・パラリンピック開閉会式でございますけれども、もう皆様は御承知のとおり、参加者数、観客数、視聴者数等々、どれにおいても世界最大規模のセレモニーでありまして、あの大会はこうだったなという印象が残るのが、メダルと、あとは、この開会式、閉会式と言われるような重要なイベントだと考えております。

IOCが定めている開閉会式の基本的な流れは、以下にありますとおり、国旗掲揚であるとか、選手入場であるとか、選手宣誓、あるいは最後の聖火点灯、いろんなものが含まれておりますが、一つ大きなパートといたしましては、芸術パートというものがございます。

3ページ目にありますとおり、過去大会どういう芸術パートがあったかということを中心にまとめております。1984年のロサンゼルス大会では、背中にロケットを積んで空を舞ったというようなシーンが記憶にありますけれども、開会式のショーアップ化が84年から進んだと言われております。

また、一つエポックメイキングなのは、2000年のシドニー大会では、先住の民族であるアボリジニに焦点を当てまして、その国の成り立ちや歴史などのアピールがこの大会から強くなったと言われております。

また、2012年のロンドン大会では、産業革命、当時のイギリスをスタジアムに再現いたしまして、そこから国が発展し、世界にさまざまな影響を与えたといった様子が表現されました。

また、昨年のリオでございます。これは皆様、記憶にも新しいかと思いますが、ブラジルの美しい自然を通して、環境政策をアピールしたと。あとは、ブラジルの民族の多様性などを表現したという芸術パートでございました。

おめくりいただきまして、今後でございますが、式典委員会というものを今年の春ごろから立ち上げるということ、先般の理事会で森会長のほうから表明をいただきまして、春ごろ、まず立ち上げました後には、どういった方針でその開閉会式を考えていくのか、東京日本として何をを見せていくのかといった、根本のところを御議論いただくのと同様に、演出の検討に関わる者、総合監督であるとか、そういった者の選定や制作体制をどうしていくのかといったことを、大体1年ぐらいかけて決めていきたいと思っております。

大体、過去大会の例を鑑みると、大体3年前過ぎてから、この時期に体制を決めるということが通例になっておりますので、それにあわせて進めていきたいと思っております。人選が決まった後、制作準備に入りまして本番を迎えるということをご予定しております。

リオでは、ここに写真をかけさせていただきましたが、8分間の閉会式で、日本のマリオ、安倍総理に扮していただきました。そのほか、テクノロジーを駆使したり、あるいは、日本的な佇まいを表現したダンスなども披露したところでございます。

閉会式、パラリンピックのほうでは、障がい者の方々にステージに上がっていただきまして、さまざまな踊りであるとか、パフォーマンスを披露していただきました。いずれも高い評価をいただいているところでございます。

本日、ちょっと短い時間で恐縮でございますけれども、過去大会で表現されてきたことといたしまして、オリンピックムーブメントということで、友情、連帯、平和等々ございますし、パラリンピックの価値として、勇気、強い意志、インスピレーション、公平、そのほか、先ほど申し上げましたように各大会の特色でございます。

そういった中で、例えば今頭に浮かぶものとしたしまして、7月24日がそのほか閉会式、パラの開会式、閉会式等で何を表現したらいいのか。

我々のビジョンは、スポーツには世界と未来を変える力があるとか、「全員が自己ベスト」、「多様性と調和」、「未来への継承」を3つの基本コンセプトといたしますし、イノベティブな大会を目指しているということ等がございますけれどもこういったところを、今後の式典委員会での検討にヒントとなるようなお言葉をいただければ、非常にありがたいと思っております。よろしく願いいたします。

○池坊委員

ちょっとビジョンとも関係するんですけれども、閉会式、開会式で日本の文化というのを、やはりそのものを生かすという精神が非常に大きく貫かれているのではないかと、それは和食もそうですし、伝統文化、伝統芸能もそうなんですけれども。人間が構築したものではなくて、自然の中で与えられたものとか、自然との共生感とか、そういったものに敬意を持って、それでいて自分自身の内なる個性や力を信じ切ること、そして人へ尊敬すること、その尊敬の上で生まれる多様性を認めて、ともに生きるというコンセプトがあると思いますので、何かそういった日本の独自の感性であるとか、美意識が反映されたようなあり方も考え得るのではないかとということが1点です。

それからもう一つは、やはりオリンピックがスポーツの祭典だけではなくて、文化の祭典であるという認識は、一般社会ではほとんど、まだこれからではないかというふうに、実際に感じています。

例えば、文化オリンピアドにしても、自分たちのやっている活動が、果たしてその中に含まれるのか、そうではないのか、そのこと自体もわからないし、基準もわからないということが多いのではないかと思いますので、ぜひ、そういったところの周知徹底、それから、そういうことを教えてくれるような、つないでくれるような人も人材も必要ではないかということ。

それから、教育プログラムなんですけれども、教育プログラムというのは、上から下への一方通行ではなくて、やはり、それを受け取った子どもたちであるとか学生が、どういうふうに自分たちのこととしてそれを捉えたかとか、どういうふうに今後の活動に反映していきたいかとか、自分の生き方に使っていきたいかとか、そういうある意味フィードバックも大切だと思いますので、ぜひ検証というと難しいんですけれども、そういう成果を形にして、次の教育に生かせるようなシステムにしていきたいと思います。

京都が非常に「よい、ドン!」、たくさん学校が入っておりますけれども、時として、県とか市がやっていることというのは、なかなか私立の学校には情報が行きにくいといえますか。例えば、京都などは非常に私立の学校が多いところなんですけれども、やはり、このオリンピック・パラリンピック教育というのは、別にある特定の子もだけじゃなくて、もう日本人、私たちみんながやはり知るべき、いろんな他分野にわたって、おもしろい切り口になっていると思います。

そういうところで、あまりこう、お隣の子はわかっているけども、うちの子は全然知らないわとか、そういう差が出ないように、あまねくそういう恩恵を享受できるような取組をしていきたいと思います。

○青柳委員長

ありがとうございます。ほかに何かございますでしょうか。それでは、ちょっと時間も押してきましたので、また開会式、閉会式のことなどは御議論いただきたいと思います。今、池坊委員が前半おっしゃっていたようなところの精神というものは、当然入ってくると思います。ありがとうございます。

それでは、以上で予定した議事内容は終わりますが、ほかに何かこの際ということであれば。

○松下委員

ちょっと幾つか伺いたいのですが、先ほどの2020東京フェスティバル、私も東京というより日本のほうが良いと思うんですけども、同じように。ただ、これはちょっとよくわからなかったんですけど、主催は組織委員会がなさるのでしょうか。今までの認証プログラムとどう違うのか、ただ、そこに集中するからフェスティバルというのか、あるいは、経済的な何か枠組みなどがあるのかということ。

もう一つは、今の開閉会式なんですけれども、どうもオリンピック・パラリンピックと分離するのが気になってしょうがなく、やっぱりフェスティバルも含めて、パラリンピックからオリンピックへつながるような発想は、もう少し持つべきではないかなと思うんですね。

いろんな事情で御一緒にできないことはよく理解しておりますが、もう少しパラリンピックもオリンピックも、それこそ壁のないことをしていくべきではないかなと考えています。

それと、今までずっと皆さんの御意見、私も賛同はするんですけど、日本、日本というんですけども、やっぱりアジアの中のと考えると、アジアのいろんな国へ行くと、オリンピック、知らないよと言われるので、やっぱりアジアという要素をもう少しどこかへ入れていかなきゃいけないんじゃないかと思いました。

○青柳委員長

ありがとうございます。

では最後に、一番冒頭に森会長から少し御紹介していただきました、資料の一番最後についております代々木競技場のことを簡単に御説明申し上げます。

これは御存じのとおり、丹下健三先生が64年のオリンピックのためにつくられたもので、世界中をあとさせたものでございます。しかも、大変な構造的にすぐれた建築で、内部空間が素晴らしい完成度を持っていると同時に、外側から見たときのアールが一番左右の端のところに鴉尾のようなものが建ち上がって、ちょうど唐招提寺の屋根を取り込んで、非常に先端的な技術で当時の建築のもう本当の先端に行くにも関わらず、日本の伝統がきちっと代々木競技場の中に組み込まれているということ。

実は、西洋美術館なんかル・コルビュジェが設計したものが去年、世界遺産になりましたが、ICOMOSでは、ル・コルビュジェよりもこっちのほうが、丹下先生の代々木競技場のほうがすぐれているのではないかというのを、ル・コルビュジェの作品が提出される前から言われていました。

ですから、かなり日本の中から推薦することができるようになれば、可能性は高いと。ただし、御存じのとおり、今、世界遺産は軒並み暫定リストに幾つも候補が上っておりますので、それを追い越してというのはなかなか難しいんですが、例えば2020年のときに、これが暫定リストに載るといふようなところまでいければ、大変幸せだということ、これを推薦している、今、国立競技場の設計もしている隈研吾さんとか、あるいは、槇文彦さんとか、丹下健三さんの弟子ですけども、88歳です。大変元気な槇先生とかがおっしゃっております。

これも恐らくオリンピック文化プログラムを盛り上げるためには、大変いい材料になるのではないかと考えておりますので、何かこれについて御意見ございますでしょうか。

○真田委員

具体的なレガシーを残すという意味では非常に大事だと思います。教育の分野でも使いますし、それと同時に、こ

のレガシーで考えていたときに、これまであった秩父宮記念スポーツ博物館、これが今は行き場がなくなっているということなんですよ。さまざまな競技場の問題で予算も削減されて、当初設置予定だった博物館はもうできないというように、行き場がないと、このままではもう、集めている資料も捨てなければいけないという、そのような状況だそうでありまして。これもあわせて遺産としてやはりきちんと、64年の、あるいは、40年の東京オリンピックのさまざまな資料をたくさん持っていますから、そういうものをぜひとも2020年でも継承できるように、お願いをしたいというふうに思います。

○森会長

中村さん。松下先生の御意見、あれ御質問だったのか、御意見だったのか、答えなきゃいけないんじゃないでしょうか。

○中村局長

失礼いたしました。2020のフェスティバルの主催の件でございますけれども、一つ一つのイベントの主催という意味では、それは東京であるとか、各地自治体であるとか、国であるとかということでございますけれども、組織委員会はそれをうまくコーディネートいたしまして、可能であればフェスティバルのような冊子をつくりまして、何月何日、どこに行けば、どういうイベントができているのかということのパッケージにいたしまして、それを日本にいらっしゃる外国の方とかにも提供できるような、そういうものをやっていきたいと思っております。

○青柳委員長

ありがとうございます。どうぞ。

○松下委員

よくわからないな。

○森会長

わからない。なお、わからなくなってしまったのではないかな。

○中村局長

申し訳ありません。ありていに申し上げますと、全部本当はやれればやりたいんですが、お金がございまして、我々はちょっとコーディネート役に徹しざるを得ないというところでございます。

○森会長

要は、みんなでやっていただければということで。

○松下委員

ほかの認証と違わないんじゃないでしょうか。

○森会長

組織委員会が企画してやれということになると、もう際限がないことになります。そういうことで、ですから、いろんな学校でやるとか、大学でやるとか、社会、大学とか、いろんな団体が、こんなことやろうよと言ってやっていただければ、そのアドバイスは大いにすると、こういうことでしょう。

○中村局長

はい、そうです。

○森会長

野村さんおられるけれども、たしか、あなたはアテネのときにやられたよね。アテネのオリンピックのときにギリシャ何とかと言うのか、悲劇か、あれを世界中みんな集まってきてやったんですよ。たしか、野村さんが主役をして、「オイディプス王」だったかな。

○野村委員

そうです。

○森会長

蜷川幸雄さんが監督をして、それも結局、国が金出すんじゃないくて、資金運営何とかをつくって金集めを一生懸命にやった。その中の1人で私はいたから、よく覚えているんですけど。とてもすばらしいことを、あそこのアテネの石の舞台でね、痛かったでしょうね、何回も何回もぶつけられて、やっておられましたね。印象に残りました。

ただ、そういうのを日本で世界中から集めてやるという、そういう企画は今はないんです。ないんだと思います。どういふふうにするのかは考えなきゃならんのかもかもしれません、というふうに思いました。今の御質問で。

オリンピックとパラリンピックのことは松下さんおっしゃいましたが、3年前にこの組織委員会ができましたときに、国会の予算委員会はこの議論ばかりやっていましたよ。何で一緒にやらないのかと、開会式は一緒にやれ、それから、100mは障がい者が走ったら、その後に健常者が走れとか、同じ日になぜやらないとか、さまざまな意見がありました。

しかし、結論が出たんです。ソチで、このパラリンピックの会長は、我々は障がい者のオリンピックは後でいいんだと。なぜかと、オリンピックは我々の前座にすぎない。

○青柳委員長

ありがとうございます。会長に締めていただいたので、ここで今日の会議は終わらせていただきます。あと、事務のほうから報告等をお願いします。

○小幡次長

簡単に、今日の資料などは後でホームページで公開させていただきます。

次回は7月ごろを予定しています。今日いろんな御意見をいただきましたので、それをWGで整理させていただきます。また御意見をいただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。以上でございます。

○青柳委員長 どうもありがとうございました。